
とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

うちはマダラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるもしもの座標移動^{↑ポイント}

【Nコード】

N4531Y

【作者名】

うちはマダラ

【あらすじ】

結標さんに憑依した人のお話です。

結標さんが

かなりチート化したり原作のストーリーが変わったりしてます。ご注意ください。

憑依したのは座標移動

みなさんは、もし禁書の世界のキャラに憑依出来るとしたらどのキャラを選ぶ？

私だったら右方のフィアンマとか一方通行辺りに憑依したいと思う。だって無双したいもん。

ああ、垣根や軍霸辺りもいいかも。アイツ等無限の可能性があるイメージあるし。

「……むすじめ あわき結標淡希。という事は能力はムーブポイント座標移動か……微妙」

鏡に映る長い赤毛をお下げ髪のように耳より低い位置で左右に結つて、背中の方へ流している女の子を見てそう確信した。

しかし、服装は原作の痴女みたいなサラシミニスカでは無く、普通の白い半袖のカッターシャツにプリーツスカートという極普通の服装だった。

……だが、これどこの制服？ 原作の結標が所属する霧ヶ丘の制服ではないが……もしかしたら中学生時代の結標なのだろうか。

まあそれはともかく。

座標移動、か。弱い能力では無いと思うのだが、なんだかなあ。

上手く使えばかなり強力な能力だが、如何せん一方通行や未元物質みたいな派手さはないし、正面突破じゃおらあああ！！があまり出来そうにない能力なんだよね。

しかし……無能力者とかに憑依しちゃうより遥かにましか。いや、上条さんは例外だけだね。

「とりあえず能力使ってみますか」

私は鏡から一メートル程離れた位置に落ちている学生鞆に目を向ける。

手のひらを広げ、鞆を掴む用意をする。

「来い、鞆！」

無音で鞆が私の顔の前十センチ前くらいに空間移動してきた。

「うおっと！」

落ちてくる鞆を慌てて両手でキャッチする。

どうやらまだ座標の指定が甘いようだ。

まだ中学生の頃の結標だし、演算能力が足りないのかな。それにしても、部屋の中だけでは情報量が少なすぎる。

「外に出てみるか」

▼ ▼

学生寮を出ると、通りにちらほら私と同じ制服を来ている人達が歩いているのが確認出来た。

飾りつきの無い黒い折り畳み式の携帯で時刻を確認してみると、7:58と表示されている。成程、今は登校時間のようだ。学校までどれくらいの距離があるか知らないけど。

とりあえず登校してる子達に着いていこう。

「あいたっ！」

「いよう、優等生！」

突然誰かに背中を思い切り叩かれたようだ。かなりイラッとした私はソイツを思い切り睨み付ける。

「いつもは三十分前には学校に来てるのに今日は遅いじゃ……あれ、何で怒ってるの？」

茶髪でややツンツンヘアの男の子はこちらを見てキョトンとした顔をしていた。

うん、誰だコイツ？

憑依したのは座標移動（後書き）

ちよいと女が主人公の小説も書きたくなったので書いてみました。
あと、チート結標さんも書きたいというのもあります

今の周囲の状況を簡単に把握しました

とりあえず今確認出来ている事を述べよう。

まず、私が通う中学は朝陽南中学あさひみなみという第七学区という特殊な能力を開発する事に念を置いている学校らしい。

将来進学するであろう霧ヶ丘に似たようなところがあるな。あそこも特殊な能力を開発させる学校だったハズ。

次に私の能力の強度は大能力者《レベル4》だ。これはクラスメイトから教えてもらった。

という事は今の時点で自身をテレポさせる事も可能っぽいね。帰宅する時やってみようかな。

今日学校行つて分かった主な事はこれくらいか。

ね……あ、今朝に私に無礼な挨拶をかましがった男の名は霧ヶ峰きりがみ優なゆというらしい。

原作にもアニメにもこんな奴はいなかった。まあ原作にもアニメにも出てないだけで結標淡希と交流がある奴は結構いるだろう。

今はもう全ての授業終わってホームルームに担任の教師が来るのを待っているが、霧ヶ峰は周りのクラスメイトとはしゃいでいる。

コイツはどうやらクラスのムードメイカーみたいな存在らしい。

それにしても常盤台中学とかに通いたかったなあ。

あ、でも美琴や黒子が入学する前に卒業しちゃうね。けど、心理メンタ掌握ルアウトの食蜂さんにはギリギリ会えるな。

ん、先生が来たようだ。



「やあ。結標君」

ホームルームが終わり、放課後イベントも特に起こらず、校門を出た所で白衣を着た男に声をかけられた。

学園都市で白衣とか研究者以外に考えられないな。

「明日は身体検査システムスキャンの日だ。悪いけど能力の精度を確かめるために研究所に来てもらうよ」

身体検査が明日あるのは知っていたが、私こと結標淡希がどこかの研究所に所属していたってのは知らなかったな。

まあ座標移動ってただでさえ珍しい空間移動系列の中でも貴重な存在らしいから、専門の研究所があってもおかしくはない。

「ああ。そうだったわね。研究所へは徒歩で移動出来るの？」

どうでも良い事だが私は会話する時は原作の結標と同じ口調で話す事を心掛けている。

特に意味は無い。ただ、演じるのがなんとなく楽しいだけ。

「結標君、今日は体調がよろしく無いのかい？ 君の能力で研究所まで行くに決まってるだろ」

研究者っぽい男は怪訝な顔をしながら遠くに浮かんでいる赤いバルーンを指差す。

「えっ」

「さあ研究所の目印のバルーンまで僕と君自身を座標移動で移動しよう……どうした？ まさか本当に具合悪い？」

「いや、大丈夫よ。あはは」

多分これって能力を使いこなす練習か何かだよな。

私を送迎のパシリに使うためじゃないよね？

……ま、いいか。どうせ帰宅する時に能力使うつて決めてたしね。

「行くわよ」

研究者の男に肩に手を置く。

通行中の人間とかに間違えて転移したりするとおぞましいオブリ
エが出来ちゃうから、まずは障害物が少ない上空にテレポするかね。
真上に障害物は無し、よし、まずは上空八十メートルくらいに座
標移動——！

「お、おおおつ」

すげー！ あっさりとテレポできちゃったよ。

見る！ 人間がゴミのようだ！ ……うわっ、研究者の男がこっ
ち不審な目で見てるよ。

これ以上変な目を向けられないためにもさっさと研究所まで行く
か。

お次は前方へまた八十メートル——！

（よしよし）

先程よりバルーンが大きく見えるって事は今度も成功したって事
だ。

座標移動を繰り返している内にバルーンの目の前くらいまで移動
出来たので、次に地面の三十センチくらい上に転移する。誤って地
面に足埋めるわけにはいかないからね。

「お疲れ様。いつもより精度とか能力を使う間隔が短くなっている
んじゃないか？」

「あら、そうかしら」

「君は自分の能力を恐れている縁があつたからな……少しはそれが
薄れてきたのかな？」

「……………」

うーむ。原作の結標はそうだったかもしれないが、私は結標であつて結標でない人物みたいな人間だからなあ。

ぶっちゃけ能力なんて私はただの便利な道具としか思つてない。

「いけない事聞いちゃったかな？」

「別に。気にしなくていいわ」

「そうかい。じゃあ行こうか、主任のところへ」

主任か。座標移動開発の主任の事なんだろうが、変な人物だったら嫌ですねー。

つつか、今気付いたがこの研究所は建物は平凡だが敷地はかなり広いな。

なんか期待されてるみたいでプレッシャーががが。

「行こうか」

研究者の男は先導して研究所内に入つていった。私はいつの間にか口の中に溜まつていた唾を飲み込み、彼の後に続いた。

今の周囲の状況を簡単に把握しました（後書き）

主人公は結構お気楽な人だから結構メンタル強いです

主任に会いました

中に入ってみるとロビーらしき空間が私を迎えていた。観葉植物や長椅子とかが置いてあるスタンダードな感じだ。

「ちょっと待っていてくれ。今から主任の神山 かみやま さんに連絡つけるから」

研究者の男は白衣のポケットから携帯を取り出し、電話先の相手と何やらやりとりを始めた。

「神山主任、結標淡希が到着しました。……え？ まだ狩りが終わってない？ いや何ゲームなんかやってるんですかアンタ」

おいおいなんか不安になってきたんですけど。頼む！ 変な奴はお断りだ！

「今日は帰って貰えて、いくらなんでも理不尽すぎるでしょうが！ 呼び出したのはアンタだろ！ てか、結標君のメンタル面に問題がるのって絶対アンタの性格せいでしょう！ ……あ」

こっちみんな。

まあ、さつさと先に進めてほしいから愛想笑いして手振っとくか。失言は誰でもしちゃう事だ。

「え？ お前がうるさいからクエストに失敗した？ 知るかつ！！ あれ、切れた」

あーあ、今思えば学園都市の優秀な研究者は木イイイ原クウウウンみたいに変人が多いのかな。

今さっきの会話だけで変人フラグがビンビンだよ。もう、ここは腹を決めるぞ。

「ん？ エレベーターが動いてる？　なんだ結局来るのかツンデレさんめ」

研究者の微妙にキモい発言の通り、チーンというエレベーターが各階で止まる時のお馴染みの音がロビーに響いた。てか、今気づいたよエレベーターがあつたなんて。

あと、何でもかんでもツンデレにしちゃうのは良くないと思うよ研究者さん。

「光山あああー!!」

「びぶるちっ!？」

今起きた事を説明しよう。エレベーターから飛び出してきた金髪ポニテの白衣着た女の人が研究者光山君を蹴り飛ばして、その勢いで飛んだ光山君が観葉植物の鉢植えに頭だけ埋まった。

それにしても原作SS2のモツ鍋さんみたいな断末魔だったな……ご冥福をお祈りするよ光山君。

「よー、久しぶり淡希」

「ひ、久しぶりね」

お、おお。何か思ったよりフレンドリーで悪くなさそうな人だ。それに美人巨乳だな。胸元が大きく開いた白衣から見える谷間がエロいぜ。

けど、あんまりこつちをジロジロ見るのはやめてほしいな。

「淡希……お前……!!」

「どうかしたの!？」

「前来た時よりおっぱい大きくなってない!？」
「ズコーーーーーッ!!」

この人が男だったら確実に壁に埋めてたぞ。ああ、女でも黒子みたいなガチレズだったら埋めるけどね。

「いきなり何よ……」

「ふふ、冗談だ。さて、早速だが実験を行おうか」

「どこで」

「外で」

妙に外の敷地広いと思っただけ。



神山に案内されて着いたのは学校にある運動場のような広い場所だった。

完全に殺風景な場所ではなく、アルファベットが書かれたコンテナがいくつ積み上げて並べてあったりする。あと何か建設に使うような重機も何台か置いてある。

「さて、まずは飛距離の検査から行おうか」

「何を飛ばせばいいの？」

「光山」

「!？」

「というのは冗談であそこにあるアレをまず飛ばしてもらおうか」

良かった。もう少しで『もうやめてry』とか言いそうになったわ。

アレって……ああ、あの楕円形の形した鉄の塊みたいなヤツか。

確かアニメで黒子がああいうの飛ばしてたよな。
とりあえずこっちに引き寄せてと。

「あ、ちよつと待った」

「まだどうでもいい事言うつもりじゃないでしょうね」

「お前確か自分の能力の精度を少しでも上げたいとか言ってたわよね？」

「そりゃあ精度が高いに越した事はないわね」

「お前の座標移動は普通の空間移動と違って始点と終点が固定されない自由度が高い能力だ。そこでだ」

背中に手を回して神山は何かを取り出した。

お、この黒い棒みたいなのはもしかや……！

「これは……」

「警棒兼用の軍用懐中電灯だ」

「この光で能力使用時の基準をつけろという事ね」

「おつ、察しがいいなさずがお前だ」

早速、懐中電灯の光を鉄の塊に当ててみる。

成程、これはいい。光が当たっている物体だけを転移すると考えれば余計な演算は必要無くなる。

朝方の違和感があつたのはこの懐中電灯という相棒が無かつたからか。早速、足元に鉄の塊をアポートと。

「どんな感じよ」

「いい感じね。余計な演算の必要が無くなったわ」

「ふつ、それは良かった。じゃあ早速飛距離の検査を始めるが準備はいいか？」

「バッチリよ」

「今までの記録はその自重九十キロのソイツを五百メートルちょいだ。それじゃあ検討を祈る」

ちよい《・・・》っておい。アバウトだなー。いや、このアバウトさはひよつとしてメンタル的に弱い結標を気遣いとかだったりするのだろうか。

まあいいや。とりあえずこの広場の奥にまで飛ばすつもりでやっ
てやろう。

——ッ！

『飛距離、千二百メートル』

「なっ！？」

「うえっ！？」

地面に幾つも設置されていた機材の音声を聞いて、思わず変な声
出してしまった。

せ、千メートル越え！？ え、原作の結標淡希さんの最高飛距離
を中二の時点で上回っちゃったよ！？

何これ憑依補正なの？ 転生オリ主がよく最強だったりするあれ
に近いものなのか！？ ……いや、少し大袈裟か。

「お、おま……淡希。一週間の内に何があった！？」

こっちが聞きたいです。

主任に会いました（後書き）

さあ 結標淡希ん第一段階の強化が始まりました。

身体検査の結果は……

「た、多分貴方がこの懐中電灯をくれたお陰じゃないかしら」

「そんな……魔法のステッキを渡したんじゃないんだぞ。いきなりこんな……」

まぐれかもしれないからもう一度やってみるか？

近くにある分銅もどきを一度こちらに寄せて、もう一回――！

『千三百メートル』

まぐれどころか記録伸びちゃったー！

「偶然の成果でも無いみたいだしなあ。お前、明日の身体検査で超能力者《レベル5》認定されるかもな」

「へー」

「意外とそつけない反応なのなお前。空間移動系初の超能力者だぞ？」

結標つて最高飛距離が八百メートルくらいで転移できるのは自重4・5トンくらいまでの物体だったよな。それで自身をテレポ出来ないから大能力者《レベル4》止まりで超能力者認定されてるんだっけか。

だから今の時点で超能力者判定されるのは当然、そう当然。と、思ったけどまだ飛ばせる重量の限界を測ってないや。

「次は転移出来る重さも測るか。……前の記録は五百キロちょい超えだったかな」

「また数値がアバウトすぎる」

「気にするな。ミリグラムとかまで測ったら鬱陶しいだろ、お前への気遣いだ」

自分で言っちゃうとただの面倒臭がりに見えちゃうよ神山さん。

「向こうにコンテナがあるだろう?」

「ええ」

「あれを飛ばしてもらおうと思ってるんだが……」

「重さはどれくらいあるの?」

「一つで約二千キロだ」

「いきなり凄くハードル上げたわね」

「いや何か今のお前だったら出来そうな気がしたんだが……無理か?」

確かに飛ばせる距離は明らかに上がってる。という事は演算能力上がってるって事だよね私。

正直……やれそうだ。

むしろ今なら出来ない気がしない。

というか原作の結標の記録は四千五百キロくらい……今の私ならこれ上回れるんじゃないか? えーと何か手頃な物はないかな。コンテナを同時にいくつも飛ばすのはかなり大変な気がするのよね。

「あれってどれくらいの重さがあるの?」

私が指差したのはキャタピラ式の巨大なトラクターだ。恐らく建設用か何か用だろう。なんかアタッチメントつけられそうな部位あるし。

「七トンか八トンぐらいだった筈だが。ってまさかお前!?!」

「ええ、そのまさかよ」

「……まあいい。やってみろ」

よーしまず懐中電灯で標準つけてと。後は始点と終点を決めて演算する。

始点はそのトラクター、終点は私の十メートル前でいいだろう。

よし、やれる——！

「凄い……」

無事に、トラクターは指定した位置に移動した。

神山の驚く声が心地良いな……ッ！？

「淡希、おいどうした淡希！？」

身体中を突然襲ってきた違和感に耐えきれずに気付けば私は両手と両膝を地面に着けてしまっていた。

何だこれ三半規管が狂ったみたいに頭がくらくらする。しかもこめかみ辺りの血管が収縮する感じもするし、身体中から脂汗が吹き出てくる。

体に負担がかかっているのか……？ ああ、そういえば過度な演算をすればそうなるんだっけか。

「大丈夫か？」

神山が私の背中を擦りながら心配そうに此方を覗き込んでくれている。

とりあえず作り笑いを神山に向けて、立ち上がる。膝はまだ震えるがすんなり立ち上がった。

一時的に体調がかなり悪くなるだけで、ヤバい後遺症とかが残るわけではなさそうだ。疲労はかなり溜まったが。

そつだよ思い出した。原作では結標は千キロ以上の物テレポしたら体調不良起こすんだつた。

調子に乗りすぎちゃつたな。

「おい、歩けるのか？」

「大丈夫。一瞬だけ体調悪くなつただけだから」

「すまん。私が止めれば良かったのにな」

「いや、私が調子に乗りすぎたのが悪かつたわ」

うわ、なんか暗い空気になつてきた。この人意外と真面目なのな。

「……明日は身体検査だから今日はもう帰れ。家で体を休ませておけ」

「分かつたわ。今日は世話になつたわね」

「ああ、待て」

「何か？」

「そのまま帰れとか酷だろ。私が車出すからそれに乗つて帰れ」

やだ……この人優しい……

▼ ▼

昨日帰つてすぐにダウンしたが、今日は特に体調不良が無いな。

今は身体検査受けるために学校運動場で順番待ちしているとこだ。

この学校の身体検査は番号順に行うらしい。

「結標さーん！」

私の元に二人の女の子が走りよつてきた。

黒髪をポニテにした白木結^{しゆい}さんと茶髪ショートカットの神木絵里

さんだ。二人とも昨日、友好的に私に接してくれた人物である。

「そろそろ結標さんの身体検査が始まるんでしょ？ 私、自分の身体検査終わった後ダツシユで来ちゃったよ」

「白木さん、結標さんの番号は1108番だからまだ十分くらい時間あるよ？」

「特等席確保のためよ。結標さんが身体検査する時っていつも人混み出来るじゃん」

え、それ初耳なんですけど。

まあいいやギャラリーごときに屈する必要はない。

「二人とも身体検査の結果はどうだったの？」

「あたしは安定の大能力者判定でしたよー」

「私もいつも通り強能力者《レベル3》判定でした」

白木さんが発火豪雨で神木さんがファイヤレイン心理調整メンタルアジャストだったか。

実は知ってるのは名前だけでどんな能力なのかは私は知らない。私に憑依される前の結標なら知ってたかもしれないけど。

「あーあ。今度こそ超能力者判定受けると思ってたんだけどなー」

「それは絶対じゃないですよ」

「何い！？」

「この学校で超能力者判定受けそうな人って霧ヶ峰君か結標さんくらいだと思いますよ」

「ぐう……でも、結標さんは超能力者になれるかもとして霧ヶ峰はなんかム力つく」

霧ヶ峰……あのムードメーカーってそんなに能力凄いのか。気になるな、霧ヶ峰の能力のみ、気になるな。

▼ ▼

「次、1108番。結標淡希」

ざわ……ざわ……。

今、私の後ろには千人くらいのギャラリーが立っています。やば
ば、少し緊張してきた。

あ、そうだ。

「すみません」

「何だ？」

「小道具って使用可ですか？」

「小道具とは？」

木陰にこっそりと置いていた懐中電灯をアポートさせ、検査官に
見せる。

「ああ、これくらいなら許可しよう」

「ありがとうございます」

「始めるぞ、配置につけ」

白線のラインまで歩き、とりあえず深呼吸する。

いかんいかん緊張しては駄目だ。別に超能力者判定受けないと死
ぬってわけじゃないんだから落ち着こうぜ私。

「まず、自身の転移を行ってくれ」

自分の転移だと……昨日まともな練習してないぞ。

座標移動って自分飛ばす時、普通の空間移動と違って自分を基準

に演算するんじゃないくて、始点と終点の演算しなきゃいけないから演算負荷が高いんだよなあ。

まあ、仮に埋まってももう一度テレポすれば皮ずり剥け回避できるからとりあえず覚悟決めて運動場の端目指して飛ぶか。

懐中電灯マジック——！

『飛距離記録——千二百二十五メートル』

ふっ、ざつとこんなもんよ。

私ともう一度テレポして定位置に戻るとギャラリーから歓声が巻き起こった。

ふふふ、ドヤ顔しちやいそうになるなこれは。

「お、おい、お前懐中電灯に細工とかしてるんじゃないだろうな？

あ、後で調べさせてもらっぞ」

「お好きにどうぞ」

「……っ、次は自分以外の物体の飛距離を測るぞ」

よっしゃなんか自信ついてきた。どんどん来いやあ！

▼ ▼

『自身飛距離——千二百二十五メートル』

物体飛距離——千三百五十五メートル

最大重量——五千六百キロ

総合評価——LEVEL5』

身体検査の結果。

ご覧の通り私、超能力者になっちゃいました。

身体検査の結果は……（後書き）

身体検査での最大重量が減ったのは主人公が体調悪くするのを恐れて少し自重したからです。

さて、次回から戦闘ストーリーや原作キャラ達を出す予定です。

【主人公の現在スペック】

【名前と年齢】……結標淡希（14）

【性格】……原作の結標よりも演算力高い、あと少しお気楽な性格だが人前ではクールぶる。

殺しはあんまりしたくないが必要ならばやる予定。

え？ ショタコンかどうか？ 知らんがな。先で分かるんじゃないんですか？

【能力】……座標移動のレベル5。

最大重量は実は10トンまでいける。だが、7トンあたりから体に負担がかかってしまう。

最大飛距離は1300メートルちょいくらい。

懐中電灯無しだと精度が悪くなり、飛距離も重量も低下する。

飛ばせる物体はあくまで固体か液体のみ。

自身の転移は楽々となす。

【主人公の現在スペック】（後書き）

まだまだ結標はパワーアップします

したらこついう風に書きます

レベル5になってからというもの……ん？ あの白い人物は……！？

超能力者判定されてから一ヶ月が経ち、結構私の生活は変わってしまった。

まず、かなりの金持ちになった。

奨学金も大能力者時代の奨学金明細書と現在の明細書を比べて三倍以上になってたし、超能力者判定祝いとして上層部の誰かさんから口座に五千万円も振り込まれていた。何これ怖い。

あと私の所属していた研究所が多くの人員や設備が送られてきて一気に騒がしくなった事が。

……これまでは嬉しい変化なんだけどね。

「デメエが第八位だな」

「ちよつと俺らと話していかない？」

こんな変化も起こってしまったわけだ。

最終下校時刻過ぎやちよつと人通りの少ない場所を歩いてるだけで頻繁にこういう馬鹿達に絡まれるようになった。

恐らく私が序列八位という超能力者の中で一番低いところに属しているから集団なら勝てるかと勘違いしてるんだろうな。強さ〓序列と考えてるなど愚か愚か。

ああ、一方通行と垣根は別よ。

……しかし、コイツ等には削板軍覇そぎいたぐんはという禁書原作者公認の序列七位のチート野郎の存在を教えてやりたくなる気分だ。

あーあ、夜中にコンビ二行くくらい普通にさせてくれよ……小腹が空いたんだよ……

「用件は？ 喧嘩を売るなんて用件だったらお勧めはしないわ。怪

我なんてしたくないでしょ？」

「可愛い顔で凄まれても全然怖くないぜ？」

「ハッ、この人数を見てまだ余裕とはますますボコボコにしたくな
つてきちゃったぜ」

「おいおい、あんまり傷付けるなよ？ 後で犯すんだからよ」

「その案にサンセー。俺に一番にやらせるよ」

ぶち殺すぞお前ら。

…… ちよつと前だったらこの状況に陥ってたら迷い無く逃げた。
しかし何度も何度も逃げている内に気付いた。キリが無い。

だから最近は絡まれたらそれなりの制裁を加えるようにしている。
いつも逃げて「八位は逃げてばかりいる腰抜け。雑魚決定」とかい
うレッテル貼られてますます絡まれるようになったら困るしね。

手にある懐中電灯をくるくる回しながら私は考える。

えーと。歩道を塞ぐぐらいの人数だが、ざっと見積もって三十は
いるな。どうやって料理しようかな。

スカートのポケットに入れてる高級コルク抜きをぶちこむ価値す
らないよなコイツ等。コルク抜きが勿体ない。

だからこれでいきますか——！

「ひっ！？」

「か、体がツ……！」

とりあえず懐中電灯の光が明確に当たる十人くらいを胸の深さま
で地面に埋めてやった。

「お、おい誰か引きずり出してくれえ！」

「やめた方がいいわよ」

「な、何で」

「地中と体が完全に密着してるのに引きずり出したりなんかしたら皮がずる剥けになっちゃうよ？ 私がもう一度貴方を転移させるなら話は別だけど」

「じ、じゃあ頼む……」

「嫌に決まってるでしょ」

「クソがあ！！ 調子に乗るんじゃないええ！！」

後ろに控えていた無事な男達の内の一人在手のひらの上に炎を出現させていた。

パイロキネシス
発火能力か。恐るに足らない能力だな。

さて、今度はどう料理してやろうかな。近くにあるビルとかに転移させて建物の一部にでもしてやるか？

「邪魔だ。雑魚共オ」

！！？

条件反射で耳を塞いでしまうような轟音が突然発生した。ついでに思わず両手で顔を庇ってしまう。

私が目を開いた時に見えたのは目の前に積み重なるように倒れている男達と滅茶苦茶に破壊された歩道だった。

「ンだア？ まだ生き残りがいやがったか」

この聞き覚えある声と口調。

電灯に照らされてますます白く見える髪と肌に爛々と光る瞳。

そして何よりこの破壊力抜群な能力……！ コイツは…… コイツは……ッ！

「おい、シカトこいてンじゃねエぞ」

いきなり一方通行きたああああ！？ ヤバい超カッコいいんですけどおお！？

多分、十三歳の一方通行さんカッコえええ！ 一般人とはオーラが違うわやっぱ。

「わ、私はコイツ等に絡まれていただけよ」

「あん？ 何だ、いつもの俺に楯突いてくる馬鹿共じゃねエのか」

ヤバい冷や汗が……生一方通行さんカッコいいけど、やっぱり怖いな。眼光がヤバい。

「つうかよオ、オマエ」

「ひっ！？」

「何で絡まれてたりしてたんだア？」

「多分だけど……私が最近超能力者判定されたからじゃないかしら」

「あア八位か。オマエ確か……座標移動って能力だったよな？」

「そうそう」

「遠目から見てたが、何でこんな雑魚共の相手なんかにしてんだア？ オマエの能力だったら逃げる事も容易だよなア。ひよつとしてサドステイックな人だったりするんですかア！？ ギヤハハッ！」

この人のツボが分からない。

ん、よく見るとコーヒーが沢山入ったコンビニの袋持ってる。おっとそーいや私の目的はコンビニに向かう事だった。危うく忘れるとこだったぜ。

てか、普通に会話出来るとは思ってた。まだ実験開始前から大分性格が丸いのかな。

「逃げ続けてたらキリが無いと判断しただけよ。適度に制裁してたら絡んでくる輩の数が減るかなと思ってるのだけど」

「なるほどねエ。イイ判断だ」

「そう？」

「オマエの場合はな」

「え？」

「オマエ八位だろ？ 絡ンでる輩の思考は大体分かる。恐らく『序列が一番下の超能力者なら勝てる』とかだろ？」

その通りだけど一方通行の笑顔って何か怖いな。

それにしても、さっきから私ビビりすぎかも。

「ズバリ、その通りよ」

「まアさっきも言った通り、オマエの場合は適当に弾いてたら敵も減っていくだろオナ。だが、俺の場合は違いエ」

「『学園都市最強』だから？」

「そオだ。学園都市都市最強の座を狙う奴等はいつまでも蛆虫みてエに沸きやがる。ああいうクソ共は正直どうしようもねエな」

「大変ね」

「今ンところは互いになア。……久々に長話してたら眠くなっちゃまった。ンじゃな」

私の隣を通りすぎながら一方通行は暗闇へと歩いていった。

あー、少ししか話してないけど何か貴重な体験したような気がするわ。

一方通行の言う事はマジであってほしいな。正直な話、絡まれる度に相手ボコボコにするのを一年くらい繰り返してたら精神が病みそうだ。

そっぴい一方通行はこの後『無敵』を目指す事になるんだよね……んん、今日はもう色々と考えないようにしよう。コンビニだコンビニ。



「結標淡希が戦闘を終了。データは取りました。また、一方通行と接触したが特に問題は無し」

『了解。引き続き監視し、データを取るように』

レベル5になってからというもの……ん？ あの白い人物は……！？（後書き）

結構容赦がない結標さん。

今回はちょい原作ブレイクですかね。

友達とお買い物に行きます

いやぁ昨日は変な奴等には絡まれたけれど、一方通行に会えて話まで出来たし良い日だった。

今日は学校が休みだということで白木さん達と遊ぶ約束してるんだよね。本日も良い日になってくれる事を願おう。さて、そろそろ出るか。

あー。良い天気。本日の待ち合わせ場所は Seventh mist セブンスミスト という服屋である。

確か虚空爆破 グラビトン 事件が起こった場所だよな。いや、起こった「た」って語弊があるな。これから三年後に起きる事件なのに。

そついや、爆発から美琴達を守る上条さんのあのシーンには思わず KAKKEEEEEEEEEEE! と叫んでしまった記憶があるなぁ。

ていうか超電磁砲の上条さん格好良すぎなんだよ、うん。もちろん禁書でも相当カッコいいけど。

「あー!!」

「は？」

うわ、霧ヶ峰だ……

コイツ、私が超能力者になってからますますウザい絡みしてくるようになっただよな。

「俺は……俺は……まだお前に負けてなんかないんだからな!! 次の身体検査で必ず超能力者になってやる! 覚悟しとけよ!!」

言うだけいつて走り去りやがった。何なんだ本当に。

あと覚悟って何を覚悟すればいいんだよ。はあ……朝から疲れる。

▼ ▼

私が集合場所に到着した時には既に白木さんと神木さんは待っていた。

テレポ使ってきたんだけど二人共早いな。

「ごめんなさい。待たせちゃって」

「あはは、気にしないで。こっちが早く来すぎただけだから」

「一応、能力使って来たのだけれどね。前も待たせてしまった記憶が……」

「結標さん真面目すぎだよ。そんなの気にしないでいいって。それより……」

ズイツと身を乗り出してこちらをマジマジと見てくる白木さん。

何かデジャヴのような。

「結標さんってスタイルいいのにもいつも露出少ない服ばかりで勿体無いよ！」

「えっ、どうしたのいきなり」

「何ですか、シャツに上着羽織って下はスラックスって！ この前も露出少ない服でしたよね！ くっそお！ 超能力者でスタイル抜群とか羨ましいっ！！」

スタイルが良い、か自覚は無いが三年後には巨乳になる未来が待ってるのは知ってる。

んーと、この娘は体型にコンプレックスがあるのか？ でもスレンダーな体型で……ああ胸か。美琴さんを思い出すな。

……で、どういう反応すればいいんだ私は。

「し、白木さん。結標さん困ってますよ?」

ナイス! ナイスフォローだよ神木さん。この娘マジ良い子だよ。

「はっ! ご、ごめん結標さん」

「別に気にしてないわよ。さ、行きましょう」

三人まとめて座標移動つと——!

▼ ▼

「本当便利な能力だよねー」

「結標さん、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「不幸だー!!」

「「「!?!?!」」」

突然の男の絶叫。

おいおいこの台詞はまさか。

「ぬおおお!? 何なんですかこの自販機は! 俺の五千円を返して!」

やっぱり上条さんだー!!!

何やら返却スイッチをガチャガチャしながら慌てふためいている。
うわぁ……確かに不幸だな。

「な、何あの人……」

「どうかしたの？」

「ちよっ！？ 結標さん！？」

私が声を掛けると上条さんはこっちにくるりと顔だけを向けた。
ほう、一方通行は整った顔立ちって感じたが、上条さんは男前だ
な……現在涙目だが。

「この自販機が俺の五千円札を」

「飲んじやったわけ」

「……うう」

上条さんから負のオーラが出始めちゃったよ。
可哀想だから私の能力で取り返してあげるか。対象は見えないけ
ど、なんとかいけるか――？

「はい」

ふう、無事に取れた。

手にある五千円札を上条さんに差し出す。

「えっ？」

「だから、どうぞ」

「えっ、これ」

「私の能力で取り返したのよ。触れずに対象を移動させる事が出来
る空間移動の亜種みたいな能力と言えば分かるかしら？」

「おおおお……お」

「お？」

「ありがとうおおおおお！！！！ 本当にありがとう！！！！」

ガシッ！ と上条さんが私の両肩を掴んできた。

え、ちょ、まさかこんなに喜ばれるとは。

「あ、ああっ！ ごめん！」

顔を赤らめながら上条さんは手を慌ててどけた。

今が原作の時系列だったら押し倒されていたかもしれないかな。危ない危ない。

「と、とにかくありがとう！ いつか必ず恩はさせてもらおうから！
！ げっ！ もうこんな時間だよ、お昼の特売が始まっちゃう！
じゃあまたな！」

……あ、行っちゃったよ。

というか名前すら聞かないでどうやって恩返しするんだろう。
それにしても、恩返しねえ。『貴方の髪の毛をツンツンモフモフ
させてください』だなんて口が裂けても言えないよな。

私はこの表面上のクールキャラをこれからも続けるつもりだから
な。

「何だっただろうあの人……」

「嵐みたいな人でしたね」

後に世界を救う英雄だよ。

▼ ▼

「よっし、絵里。あそこ行こう」

「どこですか？ ええっ！？ 下着コーナーじゃないですかあ！」

「結標さんはどうする？」

「私は別に買う下着は無いわね」

「私もありません！」

「そうですか。よし、絵里行くよ！」

「何で、私は強制連行なんですか！」

神木さんグッドラック！

さて、私は適当に彷徨くか。

▼ ▼

「結標淡希……今日は友人を連れているのか。やるなら今日だな」

白いパーカーを羽織った男は無線を取り出して耳に当てる。

「今から動くぞ。ハウンドドッグ 獵犬部隊B班をこちらによこせ」

『了解しました』

▼ ▼

「いやー結標さんのおかげで沢山買っても苦労しないわ」

「今日は本当にありがとうございました」

「いいのよ。役に立ってこそその能力だし」

神木さん十袋分も買うとかパないわ。私なんか冬用にマフラーと手袋しか買ってないのに。

「それじゃあ今日はもう解散しますか」

「二人共、家まで送ろうか？」

「いえいえ！そこまでしてもらったら悪いです」

「こんくらい余裕だよ」

「そう？　じゃあ明日学校で会いましょう」

正直神木さんは余裕に見えないが……本人達が遠慮してるならまあいいや。座標移動つと――

▼ ▼

やー。今日も良い一日にだったわ。
暇だな、夕方のバラエティー番組でも……あれ、電話？
神木さんからだ。どうしたのかな。

『結標淡希』

「ッ!？」

男の声だと……？ 神木さんの父親か何かか？

『いいか。一度しか言わない』

「ていうか誰よ？」

『お前の友人達は預かった。返してほしければ一人で第三蒸気機関
研究施設に來い。断れば友人達の命は保証できない。以上だ』

「……ち」

く、くそッ！ 私が神木さん達を送つてれば……ッ！

おいおい、今日は良い一日になると思つてたのに。はあ……全く。

犯人の野郎……誰だか知らないが全裸で大通りに埋められる覚悟
は出来てるよなあ!？

友達とお買い物に行きます（後書き）

今回は上条さんも出してみました。

閲覧、感想、お気に入り、評価等、超ありがとうございます！
書く原動力になります！ と絹旗さんもいってます！
超

私に果たし状？ いいぜ乗ってやるよ全裸にして繁華街に飛ばされる覚悟は当然

『第三蒸気機関研究施設』か。調べたところそれは第十九学区にあるらしい。

……白木さんも神木さんも優秀な能力者だ。という事はその二人を連れ去った犯人はかなりのやり手だと想定できる。

まあ一方通行みたいなどうしようもない能力でもない限り、なんとかできるだろうと思う。

にしても私の休日を滅茶苦茶にしゃがって。私に恨みがあるのかは分からないが、犯人の野郎……タダでは返さないぞ……

▼ ▼

ここが『第三蒸気機関研究施設』か。

ふーん。見たところもう使われてない施設みたいだ。中も広いみたいだし、いかにも戦闘をしやすそうな場所だな。

一人で来いとか明らかに罠フラグですよね。中に入る前に一応、自身を転移させる演算式を立てておくか。

「来たか……結標淡希」

「スクラップになる覚悟は出来てるかしら」

中に入ると白いフードを被った男が五メートル先の地点で待ち構えていた。前髪が長く顔がはつきり見えない。

いきなり敵に遭遇するとはね……他に人間はいないようだな。

周りにあるのはパイプとか大型の機械ばかりか。学園都市にしてはローテクな場所だよなあ十九学区って。

ま、内装自体は広いみたいだし転移して埋まる心配はないな。私

はね。

「と、その前に私を人質を取ってまでして呼んだ意味は何？」

「答えると思うか」

「じゃあ人質の場所は？」

「愚問だな」

「交渉決裂って事でいいの？」

「ああ」

私が懐中電灯を構えると同時に、相手の足元から二メートル程の渦潮らしきものが発生した。

なるほど、水流操作系の能力者か。白木さん達を捕らえるぐらいだから強度は高いんだろうがとりあえず――

「いくぞ、レベルふ……あがつ！？」

――首まで埋まってる。

ちよろすぎるだろ。

まさかこれで私に一騎討ちを挑もうとは……正直拍子抜けだ。つて、ヤダ！？ これじゃあまるで私戦闘狂みたいじゃないか。普通ここは問題があつさりと解決したって事で喜ぶところだろう！

「さあ、このまま頭に何かぶちこまれたくないなら答えなさい。まず、白木さん達はどこ？」

懐中電灯の光でフード男の頭に標準を定める。本気で頭にコルク抜きをぶちこむ気はないが脅しにはなるだろう。

「俺を……」

「俺を？」

「甘く見るなよ……ッ！」

突然ゴツ！！と男の周りが吹き飛ばされた。当然、地面も抉り飛ぶ。

私はとりあえず、破片が当たらないように一旦後方へ三メートル座標移動する。

「俺を見くびるなよ」

もうもうと立ち籠める白い霧の中から白いフードの男は姿を表した。

水流操作で地中ごと地面を吹き飛ばしたのか……中々のパワーだな。

しかし、地面に埋めても駄目ならこうすればいいだけだ——！

「があッ！？」

右肩にコルク抜きを転移してやった。

馬鹿な奴だな……空間移動系が相手ならこういう攻撃が飛んでくるのは分かってたろうに。

「もう一度聞くけど、白木さん達の場所はどこ？」

「……………」

どうやら答える気はなさそうだな。

それにしても、何が目的なんだコイツ。私に対抗する策も無いようだし、逃げる素振りも見せない。

不気味だ、さっさと口を割らせてやる。

次はコルク抜きを足に転移——！

「遅かったな」

痛ッ！？

「え……？」

何で。何でだ。

何故私の腕にコルク抜きが刺さってる……！？

「遅れてすみませんでしたね」

「ッ！？」

後ろに誰がいる！？

振り向くと、眼鏡を掛けた不健康そうな黒髪の男が立っていた。
まさか、コイツに十次元座標の演算式が狂わされたのか……！？

「くそッ！」

「無駄ですよ」

コルク抜きをコイツの肩に——！

演算式では相手の肩にコルク抜きを飛ばすように命令した……だが、今度は私の脇腹にコルク抜きが転移された。

「か、かは……ッ？」

さっきのも激痛だったが、今度のは耐え難い激痛だった。

とてもじゃないが立ってられない……！　クソ、ここは無理矢理にでも座標移動を使って一旦脱出を……！

「少し眠っててください」

け、拳銃！？ これはマジでまず……い……

▼ ▼

地面に横たわる結標が完全に意識を失っていることを確認した眼鏡の男は携帯電話を耳に当てる。

因みに、先程、結標に浴びせたのは実弾ではなく極めて即効性の高い麻酔銃である。

「木原数多に取り次いでください。ターゲットを拘束した、と」

私に果たし状？ いいぜ乗ってやるよ全裸にして繁華街に飛ばされる覚悟は当然

結構痛みに弱い主人公。

一方通行「自分に絡む奴等から逃げるじゃなくて倒すという選択肢を選んだ時点でオマエは既に戦闘狂だろオが」

結標「えー……」

あまりレベル5をなめない方がいい

気付くとカプセル式のベッドみたいな物に寝かされていた。

おまけに頭には吸盤式のコードがいくつも取り付けられ、手や足は拘束具のような物でロックされてしまっている。

くっそー……助けに行く側が捕まるとは。しかも一方通行以外ならどうにもなる！ キリッ！ みたいな事考えておいて、名も知らないそこらの能力者に敗北してしまったよ。

あーあ、情けないったらありやしないなもう。

「目が覚めましたか？」

突然、ぬつとこちらを誰かが覗き込んできた。

って、コイツは私に拳銃撃ってきたあの眼鏡野郎じゃないか！

キモい笑い浮かべやがって。

「おっと。能力を使うなんて馬鹿な事は考えてませんよね？ 僕がいる限り、あなたが能力を使用する事は自殺にしかありませんからね」

やはりあの時私の能力の標準が狂ったのはコイツのせいかな。

……ん、そっぴい腕や脇腹の痛みが大分、引いてるな。応急措置がしてあるのか。これなら演算をする障害にはならないな。

後は能力使うのに邪魔なのはこの眼鏡男の存在か。

そう思うとコイツの顔を見るだけで腹が立つてくるな……

不快になってきたので、眼鏡男から顔を逸らし、目を動かして周辺を確認してみる。

すると、こここのフロアを見渡すような一室が上の階にポツンと存

在しているのが確認できた。

そして、その窓ガラスから何者かがこちらを見ている。

短い金髪に顔の左側に入った刺青。そして白衣の下に来ている初期一方通行のしましまシャツに良く似た服。

うん。どう見ても木イイ原くウウウンだよなこの人。

ところで木原くんっておっさんの割には中々カッコいいよな……
って何を言ってるんだ私は。

この状況、どう見ても木原数多は私の敵だ。まず木原を倒す事を
考えねば。

『目エ覚めたかよ座標移動。無様な姿だなあ、お似合いだぜエ？
ギャハハッ！』

最初の言葉が罵声とはさすが木原くん。

『おいおい起きたんなら何か恨み言の一つでも喋れよクソガキ。折
角、そっちのマイクもオンしてやってるのによ』

ああ、この声スピーカー越しの声か。

んじゃあ、木原くんのお言葉に甘えて恨み言ではないが質問する
か。

「……まず、私をここに連れてきた理由を。そして白木さん達人質
の居場所も教えてくれるかしら、あとここは何処かもね」

『あ？ 何偉そうに質問してんだ？ 自分の立場分かってんのかク
ソボケ』

えー……なんか怒られたんですけど。理不尽だ。
てか、木原くん沸点低いなあ本当に。

『全くよオ危機管理能力つてのが無えのかよ。これだからクソガキは見ててム力つくんだよなあ……まあ、テメエをここに連れて来た理由ぐらいなら話してやる。一言でいうと『0次元の極点』だ』

はあ？ 何それ知らない。

禁書で次元に関わる語句で知ってるのは空間移動に使う『十次元座標』とキヤーリサ様が使っていた『全次元切断術式』ぐらいだ。『0次元の極点』なんか知らないぞ。

あれか、私は禁書原作で読んだのは新約一巻までだからその先の巻に出てくる要素か？

「『0次元の極点』？ 聞いた事が無いわね」

「分かりやすくテメエに説明する。よーく聞いとけよ？ まず、この世界においてn次元の物体を切断すると、断面はn-1次元になる。三次元ならば二次元、二次元なら一次元。ならば一次元を切断するとどうなる？」

「0次元になるのかしら？」

『そうだ。まずこれが基礎理論だ』

結構適当に答えたが正解なのか。

それにしても正直な感想、凄まじく机上論すぎる。そもそもどうやって一次元を切断するんだよって話だよ。

……え、まさかそれを私にやれって言っくんじゃないだろうな！？

「まさか、私をここに連れてきた意味って」

『そオだよ、テメエの座標移動を使って一次元から0次元を取り出そうってこった。出来る確証は無いがなあ……クハハッ！』

ヤバイこのおっさん本気だぞ。

さすが一方通行というチート能力を開発しただけはある。考え方

が普通じゃないよ。

『空間移動系の能力者の中ではテメエがナンバーワンだろ？ そういう事だよ。本来なら第四位の^{むぎのしずり}麦野沈利^{メルトタワー}の原子崩しが持つ、量子論を無視して電子を曖昧なまま操るといふ性質を利用して1次元を切断してやろうと思ってたんだがなあ。あの女は暗部にいて拘束するのは色々と面倒なんだよ。だからまあ最初に原子崩しと同じ超能力者で空間移動系能力者のテメエで実験しようって話だ。分かってくれたかなあ！？』

ああ、とりあえず麦野さんに手を出さなかったのは正解だと思うよ。

木原が操る獵犬部隊じゃ麦野に返り討ちにされるのが関の山だしね。

それはともかく、まだ色々と疑問がある。

「その『0次元の極点』ってのを手に入れられたとして、それで具体的に何が出来るの？」

『0次元と三次元の世界は対応しているが、三次元世界の広さに対して0次元は「一点」しかねえんだ。0次元の「一点」という『世界の全て』さえ手元にあれば、三次元の全ての座標とリンクが可能になる。ワープやレポートの為の中継ポイントにできるってわけだな。テメエが使ってる座標移動と違いえのは、その力は距離や重量に全く左右されないって事だ。銀河の果てまで飛べる能力者など存在しねえが……この方式なら欲しい物、必要な物は銀河の果てからでも手元に引き寄せ、いらぬ物、嫌いな物は全部まとめて銀河の果てまで吹き飛ばすことが出来る……どうだ、素晴らしいと思わねエか？』

なるほどね。本当に木原は他の研究者と比べて発想が飛んでるわ。

……ま、この理論が仮に確実な物だとしても人質を取ってまでこんな事をしようとしてる人物に協力する気は起きないな。

『話はこれで終わりだ。じゃあちゃっちゃと実験装置になってもらおうか座標移動』

「実験装置？」

『なあに簡単な話だ。これからお前の脳に細工して能力を使うだけの人形になってもらおうってわけ。勿論、壊れるまで使ってやつから安心しろ』

清々しい程に外道っすね！！

あれ……ひよつとして私、人生積んだくね？

『あと三分で座標移動の脳を弄くる装置を起動させる。三澤、座標移動をお前の能力で押さえ付けておけ』

「了解」

手と足は動かせない。この状況を打破するには能力を使う以外に方法が無い。

だが、能力を安全に使うにはこの三澤って奴をどうにかしなければならぬ。

さて……本当にどうしよう？

三澤、コイツの能力が今、私が思い付いた能力だったとしたら。仕方無い、もう後には退けないんだ……ここはいつちょ賭けてみるか——！

▼ ▼

みさわじん
三澤賢。

彼の能力は座標異動という空間移動系能力者相手にしか効果が無

いというものである。

この能力は対象が組み立てた十一次元座標の演算式を読み取り、それに乗っ取って相手を自滅させたりといった風に使用する。組み立てられた演算式そのものを利用するので相手は違和感に気付けないという空間移動系能力者にとっては鬼のような能力である。

ただ、直ぐに使用出来るわけではなく、対象の演算式を記憶する時間を数分ほど要する。三澤は最初この能力を結標に対して使用する時、水流操作を使う白いフードの男に頼んで困らなってもらった。更に、コピーした演算式を使えるのは約五分であり、時間がすぎたらもう一度対象の演算式を記憶しなければなくなる。

「——！」

結標が能力を使用しようとしているのを感知した三澤は一瞬、驚いた表情を浮かべたがすぐにニヤリとした笑みを作る。

「馬鹿な人なんですな。いい加減に学習すれば良いものを——！」

三澤は結標に対して座標異動を使用する。

数秒だけ空間が歪んだ後、三澤はうつ伏せで床に勢い良く倒れた。

▼ ▼

ふう。賭けに勝ったか。とりあえずこのカプセル式ベッドから脱出——！

まず、私は三澤の能力は私の組み立てた演算式を奪って演算して此方を自滅させるといった能力だと予想した。
だとしたら話は早い。

演算は相手が負担するのだから、体に深刻な負担がかかるほどの重量を転移させる演算式を組み立てて、三澤を自滅させてやればいいればいいと考えたのだ。

もう本当に、かなり危険な掛けだったな。

三澤の演算力が足りなくて物体の大量転移もキャンセルされたようにで安心した。この建物には白木さん達がいる可能性が高いからね。

「恨まないでよね。ま、あまり超能力者をなめない方がいいって事よ」

床に倒れて鼻血を出したままビクンビクンと痙攣している三澤に声をかける。

なんかヤバい後遺症とか残りそうだけど、知ったこっちゃないな。私は敵の心配をするほど優しくはない。

——さて、後は木原をどうするかだな。

あまりレベル5をなめない方がいい（後書き）

主人公は禁書のゲームの知識はないようです。

結標さんが自分の演算式が狂わされたとかいってたのは彼女が他の空間移動系よりかなり鋭かったからです。

つまり、三澤くんにとっては予想外だったというわけですね。ドンマイw

あといつの間にかお気に入りが五百超えたりとかなり驚きました。読者の皆様ありがとうございます！！

安定の木原くん

あ……さつきから何か足りないかと思ったら愛用の軍用懐中電灯が無いじゃないか。

恐らく第十九学区に置いてあるままか、コイツ等に回収されたか。ついでにコルク抜きも無い。

はあ、いずれにしても探してる暇は無さそうだ。無かったら後で神山にまた調達してもらえばいいし。

とりあえずは——！

「木いいい原くうううん」

木原に白木さん達を返してもらわないとね。

背を向けている木原の背後に座標移動すると、何かしらのコンソール（多分、十中八九私が寝かされてたカプセルベッド式の装置のやつだろう）を弄っていた木原がこちらを面倒臭げにこちらに振り向いた。

「あ？ 何勝手にゲージから出てんだア、モルモットちゃん。さつさと定位置に戻れよ」

ええ！？ 何でこのおっさんこんなに余裕なの？ 昔は一方通行の顔を見る事さえビビってたインテリちゃんだったんだよね……時の流れって不思議だなあ。

「三澤だっけ？ アイツはもう私が倒したわよ。だから能力を使うのにもう支障は出ない。貴方を地の底に埋める事も容易なのよ」
「んな事あ知ってんよ。ったく折角雇ったのに本当に使えねえクズだなあアイツ」

「なら、今の状況は掴めてるんでしょ？ 白木さん達の居場所を教えてもらおうかしら」

「ハハハッ！ 急に強気になったなあモルモットちゃんよお！ テメエこそ今の状況分かってんのかぁ！？」

と、木原の背後にあるモニターに映像が映し出された。その映像を見た瞬間、血の気が引いた。

「し、白木さん、神木さん……！」

モニターに写っていたのは紛れもなく白木さんと神木さんだった。手足を縛られ、口には猿轡 さるぐつわ を嵌められてグツタリと転がっている。

これだけでも結構ビビるが、二人は拳銃を突きつけられていた。この武装してる男達は服装からして猟犬部隊の隊員と思われる。

「お友達を助けたいなら大人しく実験装置になるこつたなあ」

「くっ……！」

「おっと、妙な動きはよしの方がいいんじゃないの？ ここのフロア全体の映像は全部向こうに行ってる。お友達の脳味噌をぶちまけたくないなら、さっさとゲージに戻る事をお勧めするぜえ？ モルモットちゃんよ」

やっぱり木原くんだな。外道な上に抜かりが無い。

ここの映像を送っている機器ぶっ壊しても、恐らく『向こうで木原に何かがあった』と処理されて最悪の結果を招く可能性が大だな。実力行使が駄目なら……ここは話し合いで解決するしかないだろ。

「分かった。けれど、一つこっちの条件を呑んでもらってもいいかしら？」

「あ？」

「白木さん達を解放してくれないかしら？」

まあ、白木さん達が解放されたのが確認出来次第、即効でここから逃げますけどね。

ついでに木原くんは埋めてやる。

さてさて、これで木原くんはどう動くかな、

「おい、一発撃っておけ」

ダァン！ と画面越しから発砲音が聞こえた。

『ヴうつ！？ んんんーッ！！』

「嘘……でしょ……？」

肩を撃たれて衣服に赤い染みを作った白木さんがで地面の上で身悶えしている光景がモニター画面に映し出されていた。

猿轡で口を塞がれているせいで満足に悲鳴すら上げられないのだろっ。

あんまりにもな光景に一瞬、頭が真っ白になった。その後木原を地面に埋めなくなる衝動に駆られたが、なんとか踏みとどまる。

いかん、ここでキレたら白木さん達の命は無い。

よし、深呼吸しよう深呼吸。落ち着こう……落ち着け私。

「テメエさあ。あんまり大人をおちよくるんじゃねえぞコラ。テメエみたいなモルモットが俺と対等に交渉出来るなんざ考えてんじやあねエぞ。……あー、ムカついたわマジで」

「貴方、下手したら今の行為で自分が終わってたかもって分かってる？ 白木さん達を人質にしてるつもりなら丁重に扱いなさい。」

「丁重お？ ギヤハハツ！！ 人質は二匹いるんだぜえ？ 何なら今から一匹殺しても俺は構わないんだぜえ！？」

うわ……これもうサイコパスとかの域だわ。

それにしても良心の欠片もないとは。心の根から悪党だなコイツ。いや、木原らしいっちゃ木原らしいんだけどね。

「早く元の位置に戻ってくれないかなあ！？ よし、じゃあ今から十秒カウントダウンをしてやる。十秒過ぎたらガキを一匹ぶち殺す。はい、いーちい！」

くそおおツ！！ 三澤潰して、一つ問題を解決したと思ったら更に困難な問題が表れやがった。

あああ！ もう木原に従うしかないのか！？

「にーい！ さあーん！ 四、五、ろくう！」

「わ、分かったわ。今すぐ……」

『ぐあああつ！？』

えっ？ 今なんか男の悲鳴が聞こえなかったか。

あれ、何か猟犬部隊の人達倒れてるんだけど。んん？ 何か二人組が乱入してきたぞ！？

『おい、大丈夫か白木！ 神木！』

『撃たれてる。……早く外へ運ぼう』

『頼んだぞ。俺はもう一人を助けに行く』

霧ヶ峰……それに、上条さん！？

「くそつたれが！！」

木原の怒号が聞こえ、いつの間にか白い煙が発生していた。木原の姿はそれによって覆い隠されてしまった。

ちっ。懐中電灯無しで視界まで潰されて能力を使うのは少し酷……か。

残念だなあ木原くんを埋めてマゾ太くんにしたかったのに。

この煙が有毒ガスだったりしたらヤバいし、とりあえずこの部屋から座標移動で一旦回避——！

とりあえず、あの部屋に充満している煙が見えなくなったら再び突入しよう。

視界が悪い場所から木原に攻撃されたら結構マズイね。仮に毒ガスが残ってたとしても上着脱いで鼻と口塞いどけば大丈夫でしょう多分。

再突入したらコンソールを操作してあのモニターに映ってた場所がどこかを調べよう。

待っててよ白木さん達、今すぐ助けに行くから。

▼ ▼

霧ヶ峰と上条は第十九学区にいくつか点在する廃工場の中に潜入していた。

廃工場といっても外観だけで、中身は多くの最新設備が設置されている、木原が率いる猟犬部隊のアジトの一つだが。

霧ヶ峰が結標達の危機に気付けたのは、たまたま白木と神木の二人が白いフードの男と、その部下と思われる武装した集団に連れ去られようとしていたのを目撃したからである。

すぐに助けに入った霧ヶ峰だったが、白いフードの男が予想外に

強く、一旦退避せざるを得なかった。

それでも諦めずに追跡したおかげでここまで辿り着けたわけだが。

「分かった。この二人を外に連れて行って救急車を呼んだ後、また戻る」

「任せたぞ上条。というか、すまないな。見ず知らずの俺に協力させちまって」

「いいって。進んで声をお前にかけたの俺だし」

白木を背負い、なんとか立っているが足がおぼつかない神木に上条が声をかける。

「歩けるか？」

「なんとか。それより白木さんを早く外に……！」

「ああ。よし、行くぞ！」

上条は自分の頬を両手で叩いて気合いを入れる。

この殺風景な割には無駄に広い部屋を見付けるのに三十分くらいの時間がかかった。退路が分かっている今でも外に脱出するには十五分くらいかかるだろう。

「行かせるか」

「お、お前は」

「クソッ！ こっちにも！」

霧ヶ峰の方は白いフードの男が、上条の方は武装した猟犬部隊の数人の隊員がそれぞれ進路を塞いでいた。

「どけっ……！」

「ふん」

霧ヶ峰が叫んで腕を上げた時には、既に白いフードの男の前に人間一人隠す程の大きさの水の壁が出現していた。

三億ボルトもの出力を持つ電撃が霧ヶ峰の手から放たれたが、それは水の壁によって阻まれてしまう。

「クソッ！ どうして俺の電撃が効かないんだ！？」

「俺は純水を操る。全くとは言わないが純水は電気をほとんど通さない。諦めろ、お前達全員でかかってても我々には勝てない」

奥歯を噛み締める霧ヶ峰と、銃を向けられ後退りしそうになっている上条。

それを見て勝利を確信した猟犬部隊の面々だったが。

「『お前達全員でかかってても我々には勝てない』ねえ。なら、私がこの人達に加勢したらどうなるのかしら？」

この場に座標移動してやってきた結標が薄く笑っていた。

安定の木原くん（後書き）

外道な木原くんが大好きです！

霧ヶ峰に上条さんが協力した経緯は次回に書く予定です。といってもそんなに深い内容ではないですが。

あと次回で中二編が終わると思います。

裏の人間は裏の人間が片付けるのね

「結標！ 無事だったか！」

「結標…… ってアンタだったのか！ よし、五千円札の仮を返す調度いい機会だ！」

敵は銃持った獵犬部隊の隊員六人とあの時の水流操作の白フード男か。

まずは、退路を塞いでる獵犬部隊隊員から埋めるか。私は上条さんを移動させる事が出来ないしな——！

「結標淡希…… お前どうやって！？」

獵犬部隊達がちゃんと壁の一部になっているのを確認してから、私は白フード男に向き直る。

はい、お前なんかに構ってる時間あんまりないからさよならっ——！

「さ、さすが超能力者…… あのフード野郎を一瞬で」

「霧ヶ峰、上条君を外まで連れてっであげて。私は白木さんと神木さんを連れて能力で脱出するから」

「は！？ 何でそんな面倒な事するんだよ！ お前の能力だったら俺と上条も転移するのは楽勝だろ！？ …… あれ？ ひょっとして助けに来た事を怒ってる？」

「違う。上条君が私の能力を打ち消しちゃうからよ」

ちらっと上条さんを見ると彼は眉を顰めてこっちを見ていた。あ
りゃ、やっぱり怪しまれたかな？

まあ後で適当にごまかしておこう。

「アンタ、何で俺の右手の事を？」

「上条、マジなのか」

「え？ ああ、マジだけど……」

「そういう事だから。上条君じゃ銃持つてる人間はキツイから、霧ヶ峰は上条君の護衛お願いね」

……というかつい先ほどから頭にチリチリした痛みが走るようになったんだけど何なんだろうねコレ。

あれ、なんかこういう感覚を起こさせる装置が何かあった気がするんだけど……嫌な予感しかない。

「くそ、木原の野郎！ このタイミングでAIMジャマー だと！？ 地面から出られなくなったじゃねーか！！」

えーあいえむじゃまー？ ははっ。

ぎゃあああああ！？ 最悪だあああああ！！

▼ ▼

「くそつたれ。まさかコイツ（AIMジャマー）を使う事になるとはな」

とある一室で木原は盛大な舌打ちをした。下手したら今見ているモニター画面に拳を叩き付けかねない剣幕だ。

「大体『0次元の極点』を手に入れるコストだけでも相当だったのによオ。その上に『AIMジャマー』まで使っちゃったら電力消費や演算装置代も馬鹿にならねえっつのー！！」

木原が結標を使って行おうとしている実験は学園都市内でも完全に違法である。

だからコソコソと隠れて実験するためにわざわざ辺鄙な第十九学区の廃工場なんかを選んだのだ。

だが、この場所には電力が他の学区に比べて少ないというデメリットがある。

AIMジャマーは『キャパシティダウン』のように能力者の演算そのものを阻害する効果は無い。

この装置は能力を暴発させて能力者を自滅させるといった方法で用いる。因みに能力の強度が強ければ強い程、自滅の可能性が高くなる。

音をシャットアウトすればいいキャパシティダウンと違って防ぎようのない強力な装置だが、その分コストも高い。大量の電力と演算装置が必要になっているのだ。

だからこんな電力が少ない場所でAIMジャマーを使っている途中に他の機材を使うと、施設全体がブレーカーダウンしてしまう危険性が極めて高い。

「こんなボロつちい場所でAIMジャマーなんざ使いたくないから座標異動とかいう能力者を雇ったつてのによ。ま、あの使えねえ屑は後でミンチにして豚にでも喰わせるとして、今は座標移動を捕らえる事に専念するか」

▼ ▼

まるで見計らったかのようなタイミングで二つの通路から大勢の獵犬部隊が侵入してきた。

木原がジャマーを使ってきたか。

「次から次へとっ！」

「霧ヶ峰！ 今、能力を使ったら！！！」

もう遅かった。霧ヶ峰が放った電撃が暴発して私に——！？

「大丈夫か！？」

「な、なんとか」

——届く前に打ち消された。

上条さんがとっさに幻想殺し（イマジンプレイカー）が宿る右手を突きだして、私を庇ってくれたのだろう。

……危うく仲間に殺されるところだったよ。上条さん、白木さん背負っているのに反応速度ばねえ。

「す、すまん！」

「いや、私も早く言えば良かったわ」

真っ先に、衰弱している白木さんと神木さんだけでも外に連れ出すべきだった。肩を撃たれている神木さんは特に。

霧ヶ峰と上条さんに状況を説明したかったが為に、あんまりにも頭が回らなすぎたか。阿呆だな私は。

武装した数十人の大人相手に今や能力を使えないに等しい中学生数人が勝つなんてどう考えても無理。

周りに仲間がいらないなら暴発覚悟で能力使っていたかもしれないが……もう私が大人しく投降するしかこの場を押さえる方法はないな。

降参の旨を伝えようと私が口を開こうとした瞬間、このフロアが一気に暗くなった。

「停電……！？」

思わず天井を見上げると、一部分に亀裂が入っていた。何のアクションの起こせずに啞然としていると、そこが砕けて一人の男が天井から降りてきた。

崩れた天井から指す日の光がその男を照らす。

「垣根帝督！？」

思わずその人物の名前を口に出してしまっていた。

長身で整った顔立ち。モデルと言われても全く疑えない風貌の垣根は数十人の獵犬部隊達を一瞥すると、ニヤリとしながら髪を掻き揚げた。

うわぁ……この仕草はイケメンにしか許されないよな。

「ったくよ。裏の糞野郎がカタギのガキに手え出してんじゃねーよ」

垣根が軽く腕を振るうと天井の穴に繋がる階段状の白い物体が組み立てられていく。

これが垣根の能力、ダークマター未元物質か。やはり学園都市二番目の能力だけあって応用性も半端ないな。

お、垣根が能力をまともに使えてるって事はもうジャマーの効果は無いようだな。よし、まずは上条さんに背負われている白木さんをこっちにアポート——！

「ん？ あれっ？」

「上条君、白木さんと神木さんは私が連れて脱出するから。貴方達はその白い階段みたいなのを使って脱出して」

「分かった！ 行くぞ霧ヶ峰！」

「オラ、さつさと行けテメエ等。俺の戦いに巻き込まれる前にな」
「誰だか知らねえけどサンキューな！」

霧ヶ峰と上条さんが未元物質製の階段を急いで駆け上がる。逃がすまいと銃を向けようとする猟犬部隊もいたが、そういう奴等は全員地面に叩きつけられていく。恐らく垣根の不可視攻撃だろう。

ここは垣根に任せるか。私はさつさと白木さん達とここから脱出しなければ――！

▼ ▼

救急車に運ばれていく白木さんと神木さんを見送った後、私は一先ず胸を撫で下ろした。

「主犯は捕まったんですか？」

アンチスキル
警備員で未来の一方通行の保護者の黄泉川よみかわに上条さんがさつきから質問を繰り返している。しかし、どれも首を振られてしまっていた。

まあ相手は暗部でしかも木原くんだしそう易々とは捕まらないよな。

神妙な面持ちのまま上条さんがこちらに戻ってくる。

「しっかし上条もお人よしだよな。走ってぶつかってきた奴に協力するなんてよ」

「だってお前があんな必死な顔で『同級生が拐われた！』とか言うから放っておけなかったんだよ！」

なんと、助けに来てくれた理由それだけですか！？
いや何というか凄く上条さんらしいわ。

「霧ヶ峰、上条君ありがとう。本当に助かったわ」

「同級生を助けるのは当然だ、うん」

「五千円の飯もついでに返せたみたいだし、俺は満足だぜ」

「今回の飯は五千円なんて物じゃないわよ。私や白木さん達の命まで救ってもらったんだし。……そうだ、今度このメンバーでどこかに食事に行きましょうか。白木さん達も連れて」

「お、いいなそれ」

「マジですか!？」

「勿論。白木さん達の退院後だけど」

「やっと不幸な上条さんにもラッキイベントが……!!」

ふふ、予想以上に喜んでくれたな。

……右手の事知ってる理由はネットで見付けたとか適当に嘘ついとけばいいよな。

「結標、お前もさっさと救急車に乗るじゃん」

あ、そっぴや私も一応怪我人だった。

裏の人間は裏の人間が片付けるのね（後書き）

最近感想増えてきて嬉しいです。

お気に入りやポイントも凄く励みになってます。

ぶっちゃけ結標さんはまだまだですね。まあまだ第一段階目の強化だから仕方ないね。

おいしいところは垣根が持っていく。

今回は結構飛んで霧ヶ丘女学院入学編になります。

ここまで読んでいただきありがとうございましたm——（m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531y/>

とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

2011年12月3日15時50分発行